いだてん 韋駄天の記

劇作家 岡部耕大 ㊸

連れ戻しに来た父

「ずんだれ」はだらしないとか、きちっとしていないということか。「ふうけもん」は風みたいにぼけている者といった意味である。わたしなどはこの言葉を耳にするだけで吹きだしてしまうが、東京の連中には「それは日本語ですか」となる。ずんだれが。しかし、わたしはこの松浦方言で本を書いたのである。戦略である。

時代は前衛劇真っ盛りの時代であった。前衛劇をやっている人に「あんた、わかってやっているのか」と問うと「わかってやったら前衛劇じゃないじゃないか」と、わかったようなわからないような、それこそ前衛劇のような答えが返ってきた。

映画も「仁義なき戦い」に代表される実録物が流行り始めていた。方言や時代のファッションや事件が武器になっていた。新宿ノアノア、新宿アート・ビレッジ、高円寺シューベルト、池袋アートシアター。松浦弁で公演をした劇場名である。方言で走り、飛び、暴れるようなわたしの劇も前衛劇のひとつだったのかもしれない。

楽屋は雪や雨のらせん階段である。寒さに震えながらも心は火照っていた。父がわたしを連れ戻しに来たのがこのころである。あれは、京都の京大西部講堂で旅公演をしていた時である。父が西部講堂まで訪ねて来た。わたしのチームは京大の学生寮で学生に配るチラシを分けていた。京大生も協力してくれた。父は黙って見ていたが、黙って帰った。わたしは悪びれてはいなかった。苦労は若い日にすべきである。いまも京大生だった人とは付き合いがある。

父はわたしを連れ戻して、松浦でしかるべき職に付かせるつもりでいたらしい。しかるべき嫁も決めていたのかもしれない。もし、と思う。もし、わたしが父に従って松浦に連れ戻されていれば、多分、わたしは朝な夕なに、父を恨み罵倒して生きたはずである。あの日から、だれにも責任を転嫁することはできず、だれを恨むこともできないわたしの日々が始まったといえる。

後年、松浦にも素晴らしいホールができて、ホールのこけら落としをやり、年に1回の松浦公演をするようになったが、父は生涯わたしの演劇は見ずじまいであった。父とわたしは、とうとう、ひゅうらひゃあらの関係であったのである。

新宿駅西口の線路沿いに飲み屋の横丁がある。いまは思い出横丁としゃれた横丁名になったようだが、われわれが通っている時代にはションベン横丁といった。焼き鳥が名物で、横丁の近所からは犬がいなくなると、笑えない冗談をいう人もいた。飲むのは酎ハイである。焼酎をハイボールにしたものである。それとは別に焼酎をコップ1杯頼んで、酎ハイに混ぜて飲むと強烈に酔っぱらう。

（松浦市出身）